

随想 無駄の楽しさ

「納得のできない無駄を省くのが文明、納得のできる無駄が文化」

（株）PPQC研究所 加藤 宏光

昔、小咄として読んだ物語がある。

ある南の島を訪ねた人があった。南の島はまだ未開の国であり、訪ねたのは文明国といわれる開けた国の人。この人を《文明人》と呼び、未開の国の人を《未開人》と呼ぶことにする。

文明人が、仕事もせずただハンモックで日がな一日寝ている未開人に聞いた。

『君は働かないのかね？』

未開人が文明人に聞き返した。

『働くとうなるのかな？』

文明人が答えた。

『そりゃあ一所懸命働けば、それに見合うお金がもらえる』

未開人が、重ねて聞いた。

『お金がもらえるとどうなるのかね？』

文明人が、また答えた。

『いっぱいお金がもらえるとお金がたまる』

『それで？』と未開人。

そこで、文明人が声高に答えた。

『いっぱいお金がたまれば、毎日寝て暮らせるのだよ！』

未開人はつまらなそうに、

文明人に話した。

『それだったら、俺はいつだって寝て暮らしている!!』

筆者はこの話がとても好き

で、ことあるごとに話したものである。たとえば三五年以上前に、筆者がコンピューター

プログラムを書いていたころ、世間ではまだコンピューターの役割を十分に理解していなかった。当時、コンピューター

はまだ高価なツールであり、コンピューター本体、モニター

（当時はCRTと呼ばれていた）、カラープリンターをそろ

えると優に一〇〇万円を超え、たし、ハードディスクは一メ

ガバイト（ギガバイトではない）当り一万円もした時代

ある。

コンピューターシステムを買っても、プログラムが入っていないため、何もできない。

それが当たり前どころ、コンピューターが仕事にどのような役割をこなすのかを理解できないヒトは少なかつたのである。

筆者がこのようにときに引用したのが、先の小咄であった。

当時、筆者の研究所ではデータの処理からデータベース化

を進めていた。コンピューター

を利用してデータを処理するようになると、その昔《手書き、手計算》で処理していた時代にはもう戻れないことを実感する。

ちなみに、著者の研究所で行っている《卵質検定業務》を例に取ってみよう。

①九〇個の卵について個卵重測定

②その内三〇個について卵殻の厚さ測定

③同様卵白の厚さ測定

④同様卵黄色測定

⑤同様卵殻色測定

計測器機でこれらのデータを計り、自動的にコンピューター入力した上で、ハウ・ユニットを計算してデータを表として打ち出す作業をオートマチックにこなす。また、各項目の数値を統計処理してヒ

ストグラムを作成、印字する。

この時に処理する数値はどの分析においても同じモノであるが、手計算で分析するにはその都度同じだけの手間を掛けることになる。そのような同じ処理こそコンピューターがお手のものとする業務である。

ちなみに、筆者が公立研究所にいたころの作業で、今の数値分析をすれば、スタッフ

の数は現在の四〜五倍を必要とする。

つまりは、業務の無駄を省いているのである。業務の無駄を省くと利益性が上昇する。

トヨタ自動車が、世界に冠たる利益性を維持しているのは、世界共通語となったトヨタシ

ステムによる無駄の削減によるところが大きい、と聞く。

一方、無駄を省いて出た利

益で野球チームを購入した《ソ

フトバンク》を見ても、利益を出して無駄を省いて無駄をする、のパターンは多い。無駄を省いて無駄をする。いかにも皮相な行動である。筆者はこの事実に対して、筆者なりの答えを出した。

《ヒトは納得のできない無駄は許せないが、納得のできる無駄はあえて行う。納得のできない無駄を省くため文明が発達し、納得のできる無駄である文化に花を咲かせる》

文明と文化は似て非なるモノなのである（少なくとも筆者にとつては…）。

過日テレビで、アフリカ系の難民のキャンプ生活がク

ロイズアップされていた。幼い少女が一日何度か生活のため水を汲みに何キロも歩く。その水は汚く、飲めば病に冒

されるかもしれない。《命を奪

う水を命を繋ぐためにくみに行く》というナレーションは心を揺さぶる。一方で、かつて彼女の数世代前のヒトたちは、採集文化で暮らしていた

（著者の世代は、そうした採集文化の民族レポートを始終目にした）。

貯蔵という習慣のない採集文化では、半日の採集活動で部落が食べるモノを得て、均等に分ける。残った時間を踊

り、歌って暮らす。文明が侵入して、伝統的な文化を棄てるのは、文明の持つ利便性と貨幣文明の魔力に毒されるためなのだろうか？

そこには、先に上げた《ハンモックに寝ている未開人とそれを非難する文明人の笑い話》の示唆する皮相が現れているように思われる。

いるように思われる。